

発見した。一向に眠気はなく、先生に、若き日のアマゾン行きの夢の話しなどうかがったり、途中で乗り込んできたズーズー弁のおじさんの話しに吹き出したり、又おじさんが、私達の団体を理解しかねて、「マネージャー（先生のこと）、若い娘さんをこんなにたくさん連れて旅行ができて幸せですなあ。さすがは、京都の人には美人が多いね。」とジロジロと顔を見られ、皆顔を上げることができず、そのまま少々トロトロとして仙台着。フト気がつくと、汽車はいつの間にかシュツシュツポツポに変っていた。

汚れた顔をなんとかごまかして、いよいよ旅行気分も盛り上がり本領発揮。トランプ、おしゃべり、食べること。そして、ワッペンを背中にはり合いしたり、ウロウロ、ワイワイと車内はどこかの教室のようにぎやかさになった。

11:45 盛岡から十和田

盛岡で小さなディーゼルにのりかえ、岩手の田舎を走った。啄木で有名な渋民村をすぎる。"シブタミの山に向いて言うものなし

シブタミの山はネムタかりけり。"

目をしつかりととじ、口をポカリンと開け、これから訪れる十和田湖などを夢に見ながら、車のユレに合わせてコクリコクリと十和田南についた。ここからバスで休屋へ。そして、船で十和田ホテルまで行つた。夕方の湖は曇つていて寒かつた。湖からホテルまで急な山道を、道端に咲いているあじさいの花をつみながらゆつくりと登る。宿の水は冷たくて、ハンカチ程度のものを洗つていても耐えられなくなる。その夜は、さすがの私達も夜行の疲れで、どこからか聞える水音を聞きながらすぐ寝てしまった。

十和田より函館

短食 2の1

東北での一夜が明けると、どんよりとした曇空、吐く息が白く見える冷たい朝であつた。フキ、ワラビ、ゼンマイ等の、山菜料理のおいしかつた事が印象に残っている。

7時30分 朝もやをついての出発。神秘的な色を漂わせる十和田の湖に別れを告げ、昨日、ガイドさんに習つた"湖畔の乙女"のコーラスを乗せて、ダケカンバの木々の緑の

アーチの下をくぐって、バスは奥入瀬の溪流に沿って走る。

小さな橋を渡る度に、右に左にと、めまぐるしく変る溪流は、時には、苔むした岩肌に、真白いしぶきをくだけ、時にはゆるやかに流れ、両岸には緑の間から、勇壮に、又今にもとぎれそうに細い絹糸のように、銚子の滝や、雲井の滝等の大小様々な滝をみることが出来る。リュックを背負って、このすばらしい山の道を歩いてくる若い人達のグループを見て、自分達も、バスをおりて歩いたらどんなにすばらしいだろうとくやしがつた事だった。途中、柱の古い大木に、大石がもたれかかる「石ケ戸の洞窟」で小休止。うす暗くて、その洞窟のあちこちには点々と白く跡がついている。誰かが「これは、緑結びのおまじないで、水でぬらした紙を投げ、出来るだけ上の方にひつつければ、良い緑にめぐりあえる。」と聞いてきたものだから、皆はそばのせせらぎで、しめした紙を放り上げて大奮闘して、御利益があるかどうか…………。

奥入瀬を過ぎると、単調な山あいの道のため、朝5時に起きた事が、バスの振動と共に眠気を呼び、コックリコックリやっている間に、今までの景色とは、うつてかわつて見晴らしの良い所にやつてきた。八甲田連峰を遠くに望み、見わたす限り緑のスロープが続く菅野高原に着いたのだ。ここでバスを降りて記念撮影。寝そべっている牛に、こわごわ近づいて一緒に写真をとろうとするのだが、牛の方が逃げてしまう。それを追いかけるグループや、草の上にねころぶ人達等々、今までバスの中に押し込められていたが、大いに手足をのばして休むことが出来た。

岩木山展望所、青森展望所を経て、6時間近いバス旅行を終え、青森に着いたのが1時30分頃。青森駅から連絡船までは、可成の距離があり、ものすごく長いプラツトホームを渡り、階段を上り、重い荷物を持って、ヨタヨタと皆の後についてあるくのがやつとで、売店に売っているおいしそうな青いリンゴも、横目でにらみつけただけで、どうやら船に乗り込んだ。

ドラが鳴り、船は岸壁を少しづつはなれていく。これから何日間かは、本州ともお別れと、段々とかすんでゆく津軽の山並をながめながら、ちよつとオセンチになつてきたら、急に寒くなり、風も強くなつてきたので早々にデツキを離れて船室に入り、トランプやゲームをしてさわいでいると、船がゆれ始めた。海峡の中央にさしかかつたらしい。横になつた方が楽だと、聞いたので、コートをかぶつてねころんでいる内に、窓を通してはるか遠くに、夕やみ迫る函館の山々が見え出した。青森を出て5時間近くたつている。思っていたよりも長い船旅であつた。

船が函館につく頃になると、静かに雨が降り出して、私達の北海道の第一歩はこうして雨と寒さに始まったのである。

函館 → 札幌

大食 3

今にも泣き出しそうな空をにらんで宿舎「新松」を出発。まず、トラピスト修道院へ。背のびをして中をのぞいては見るが、いつこうに人の気配はない。その辺をキヨロキヨロのぞき回って、やたらに写真をパチパチ撮って、貧しいピンクのあかしの花を見てバスに。

それから五稜郭公園。霧雨と風のため寒い寒い。大きすぎて五稜なんてわからなかった。わずかに大砲と石垣とでそれをしのいで終り。

次は函館山。こゝも又雨と霧のため何も見えない。様々の木の繁った山道と、中腹での眺めだけ見て下山した。誰やらの銅像とか市街地を回って駅前で下車。時間待ちのため思い思い街へ散る。|=森屋（ボウニモリヤ）デパートの下着売場は時ならぬ冬もの下着の買物客でごつたがえす。どこかで見たような顔がいつぱい。

特別列車に割り込ませてもらって札幌に向う。歌って、遊んで、食べてすっかり疲れた頃札幌に着いた。駅前から宿舎へのバスに玉川学園の男の子がまちがえて飛びこんできた。それも三人も四人も。バスの中の大学のオバチャン達に面くらってキヨロキヨロ。宿はユースホテル。夜はみんなと街に出たが何の変てつもない。ただ寒いだけ。元気いつぱい、ノースリーブでかつ歩した。ラーメンを食べそこなつて、コーヒー飲んで帰った。